



Messidor Ensemble

メシドール・アンサンブル演奏会

2010年7月3日(土)

ティアラこうとう 小ホール

メシドール・アンサンブル演奏会

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

弦楽四重奏曲 第7番 へ長調

<ラズモフスキー第1番> 作品59-1

第一楽章 *Allegro*

第二楽章 *Allegretto vivace e sempre scherzando*

第三楽章 *Adagio molto e mesto*

第四楽章 *Thème russe: Allegro*

————— 休憩 (10 分間) —————

ヨゼフ・ラインベルガー

九重奏曲 変ホ長調 作品139

第一楽章 *Allegro*

第二楽章 *Menuetto: Andantino*

第三楽章 *Adagio molto*

第四楽章 *Finale: Allegro*

フルート： 金井 麻子
オーボエ： 吉川 菜津子
クラリネット： 金内 智恵
ファゴット： 秋山 直大
ホルン： 田中 秀樹
ヴァイオリン： 竹島 愛弓
宇野 格
ヴィオラ： 林 俊夫
チェロ： 坂本 謙太郎
コントラバス： 島田 奈央

2010年7月3日(土) 19時00分 開演

ティアラこうとう 小ホール

この演奏会に当って齋藤純一郎先生・林徹也先生にご指導を頂きました
この場を借りて御礼申し上げます

曲目解説

美術・音楽・文学を問わず、優れた芸術作品はしばしば作者が無限の時間の中で推敲した結果のように語られる。締切に追われることが品質面の妥協を想起させるためであろう。しかし現実には優れた芸術作品の多くがこの魔物との戦いの中で生まれている。だとすれば締切は作品の完成度を抑えるリミッターではなく、むしろ作品を生み出すモチベーション、創造の母と考えた方がしっくりいくのかもしれない。

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)

弦楽四重奏曲 第7番 ヘ長調<ラズモフスキー第1番> 作品59-1

ベートーヴェンの名は耳疾のエピソードと共に語られることが多い。それこそが彼の締切であり、創作の原動力だったからである。事実有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」(1802)には、聴力を失う前に音楽の新たな領域を拓かねばならないという彼の強い意志と焦燥感が顕われている。この時期～いわゆる中期～のベートーヴェンは追い立てられるように作曲に取り組み、交響曲<英雄><運命><田園>、ピアノ協奏曲<皇帝>、ヴァイオリン協奏曲、ピアノソナタ<熱情>など、文化史に残る珠玉の名曲を数多く生んだ。

この曲もそのひとつで、音楽史上最高の弦楽四重奏曲の呼び声も高い。彼としては7番目の弦楽四重奏曲だが、ウィーン駐在ロシア大使ラズモフスキー伯爵の依頼で作曲された3曲の1番目であるため、「7」「1」ふたつの番号を負っている。形式感を保ちながらも主題が自在に発展される書法に、ベートーヴェンが締切との戦いの中で切り拓いた新しい世界を見ることが出来る。

ヨゼフ・ラインベルガー(1839-1901)

九重奏曲 変ホ長調 作品139

7歳で教会のオルガニストを務め、12歳でミュンヘン音楽院入学、14歳で個人教授として生計を立て、20歳で同音楽院の教諭になったという天才ラインベルガー。25歳でミュンヘン合唱協会の指揮者、38歳で宮廷楽長に就くなど、当時の成功者だったが...が、現在ではその名を知る人は少ない。推察するに、若くして安定的な地位を得たことで、彼はかえって積極的・冒険的な作曲活動から遠ざかり、寡作かつ保守的になり、それゆえ時の流れに埋もれてしまった。

とはいえ忘却は無価値を意味しない。この曲を一聴して分かるように、ラインベルガーの作風はベートーヴェンやメンデルスゾーン(1809-47)に通じ、端正で、聴きやすい。不協和音に溢れ、雑然とした現代にあって、彼の作品の清涼感は再評価されており、近年新たな音源が発売されるなどの動きもある。もし彼が教職・公職に就かず、専業作曲家として締切に追われていたら、どんな作品群が生まれたのか...想像を巡らすのも一つの楽しみ方であろう。

メシドール・アンサンブル

「メシドール」とはフランス革命暦にある月の名前の一つで、現在の6月19日から7月18日に相当する。初回の演奏会がこの時期だったことが名前の由来。以来この時期の演奏会開催が多いが、語感の爽やかさとは裏腹に、日本では梅雨に当たるのが悩みの種。

演奏会のたびに いくつか演奏したいと思っていた曲 を携えた有志が集う緩やかな集団を標榜しており、毎回楽器編成・メンバーの顔ぶれが変わる。これまでに参加したメンバーは、社会人、学生、主婦、職業音楽家まで35名にものぼる。36人目はあなたかもしれない！！

なお、公式ウェブサイト (<http://messidor.hp.infoseek.co.jp>) で出演者の詳細なプロフィール・今後の活動・過去の録音等を公開中。

これまでの演奏会

第1回 (2002年7月13日 於：新宿文化センター 小ホール)

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第一番 二短調 Op.49 (フルート版)

ブラームス：クラリネット五重奏曲 口短調 Op.115

第2回 (2003年7月6日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール)

ハイドン：弦楽四重奏曲 二短調「五度」Op.76-2

ビゼー/シンプソン：フルート・チェロ・ピアノのためのカルメン幻想曲

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲 へ長調「アメリカ」Op.96

第3回 (2004年2月15日 於：新宿文化センター 小ホール)

モーツァルト：フルート四重奏曲 第一番 二長調 K.285

オーボエ四重奏曲 へ長調 K.370

アダージョとロンド 八短調 K.617

ピアノ四重奏曲 第一番 ト短調 K.478

第4回 (2004年11月20日 於：ティアラこうとう 小ホール)

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第一番 変ホ長調 Op.12

キュフナー(伝ウェーバー)：クラリネット五重奏のための 序奏、主題と変奏

シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調「鱒」Op.114

第5回 (2005年7月10日 於：ティアラこうとう 小ホール)

ヴォルフ：イタリアのセレナーデ ト長調

モーツァルト/ヴェント：フルート四重奏のための『魔笛』より抜粋

チャイコフスキー：弦楽四重奏曲 第一番 二長調 Op.11

房音くらぶ 音楽祭 (2005年8月20日 於：南総文化ホール 小ホール)

モーツァルト：弦楽五重奏曲 第4番 ト短調 K.516 より第一楽章

第6回(2006年4月30日 於:ティアラこうとう 小ホール)

モーツァルト/ロットラー:木管五重奏曲 八短調

ベートーヴェン:七重奏曲 変ホ長調 Op.20

クリスマス・コンサート(2006年12月17日 於:西千葉 カフェ・エラブル)

モーツァルト:フルート四重奏曲 第一番 二長調 K.285

ヴィヴァルディ:『四季』より「冬」

第7回(2007年5月13日 於:ティアラこうとう 小ホール)

ベートーヴェン:アダージョとロンド(六重奏曲 変ホ長調 Op.81b より)

ボロディン:弦楽四重奏曲 第二番 二長調

モーツァルト:ディヴェルティメント 第十七番 二長調 K.334

第8回(2008年6月29日 於:ティアラこうとう 小ホール)

バッハ:管弦楽組曲 第二番 口短調 BWV1067

シューベルト:八重奏曲 ヘ長調 D.803

美浜音楽祭(2009年3月21日 於:幕張ベイタウンコア 音楽ホール)

メンデルスゾーン:ピアノ三重奏曲 第一番 二短調 Op.49(フルート版)

第9回(2009年6月21日 於:ティアラこうとう 小ホール)

シェーンベルク:浄夜(弦楽六重奏版)Op.4

ブラームス:弦楽六重奏曲 第一番 変口長調 Op.18

第10回(2009年11月22日 於:ティアラこうとう 小ホール)

モーツァルト:フルート四重奏曲 第一番 二長調 K.285

プーランク:ピアノと管楽器のための六重奏曲

チャイコフスキー:弦楽六重奏曲 二短調 Op.70「フィレンツェの思い出」

2010年霧降の森ジョイントコンサート(2010年6月13日 於:日光フィンチホール)

モーツァルト:フルート四重奏曲 第一番 二長調 K.285 より第一楽章

ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第7番<ラズモフスキー第1番>Op.59-1 より抜粋

メシドール・アンサンブル 第12回演奏会

2010年12月12日(日) 14:00 開演

於:ティアラこうとう(都営新宿線/半蔵門線 住吉駅)

ブラームス:ピアノ五重奏曲 ヘ短調 Op.34 他

(曲目は変更することがあります)



web site



e mail

座席当日指定 1000円

2010年8月1日 先行予約受付開始

messidor_ensemble@yahoo.co.uk 宛の電子メールで

お名前・ご住所・電話番号・Eメールアドレスをお知らせください。

出演者の横顔

フルート：金井 麻子

10歳でフルートを、15歳でオーケストラ活動を始め。上智大学管弦楽団、オーケストラ・ディマンシュ、幕張ベイタウンオーケストラ、美浜音楽祭祝祭管弦楽団等で首席奏者を歴任。結婚後姓は変わっているはずだが、チラシ制作担当者が変え忘れたため、以後旧姓で通している。現在メシドール・アンサンブル公認専属炊事係（飯どーる）を務める。

オーボエ：吉川 菜津子

中学校の吹奏楽部でクラリネットを始め、高校のオーケストラ部では定員オーバーの憂き目に会う。先輩の「これも黒いよ」という言葉でオーボエに転向し、そのまま某音楽学校に進学。総合優秀賞を受賞し首席で卒業。オーボエを七澤英貴氏・高橋淳氏に、室内楽を太田茂氏に師事。元吹奏楽連盟管楽器講習会講師。現在丸の内交響楽団・JR東日本交響楽団に所属。当団胃袋係。

クラリネット：金内 智恵

10歳でクラリネットを始め。上智大学管弦楽団入部早々に常任指揮者汐澤安彦氏に見出され、在学中全ての定期演奏会に首席奏者として参加。卒業演奏会ではウェーバーの協奏曲を演奏した。当団には第1回以来断続的に出演し、その間に2度の出産を経験。育児をこなす傍ら、仕事もし、練習後の飲み会はかかさず参加するという少子高齢化時代の模範的演奏者である。

ファゴット：秋山 直大

中学～高校時代吹奏楽部に所属し、自分の性格に合った楽器を求めてトランペット、チューバ、オーボエを遍歴。上智大学管弦楽団の入団に際し、パート員が少なく出演回数が多いという理由でファゴットに転向。メロディと伴奏の程よい配合比率が性に合ったのか、やっと落ち着き、そのまま現在に至る。平日は航空機整備、週末はオーケストラ・ディマンシュで活躍している。

ホルン：田中 秀樹

中学校でトランペット、大学でホルンをはじめ。同志社交響楽団では、初ステージでリストの交響詩「前奏曲」のソロを吹いたのを契機に卒団までの4年間を通じてトップ奏者を務める。現在は同志社東京アンサンブル、東京プロムナードフィルハーモニー、板橋ホルンクラブに所属。霞が関での仕事の傍らホルン三昧の日々を送っていたが、最近は初孫の顔を見に行くという動作が加わり、更に多忙を極めていく。

ヴァイオリン：竹島 愛弓

千葉出身。幼少よりヴァイオリンとピアノを学び、UC バークレー学士過程、マンハッタン音楽院修士課程卒業。大阪、カリフォルニア州ナパ、バークレー、ニューヨーク、マイアミなどを経て 2007 年帰国。音楽を通じて世界中を旅した経験から「音楽に国境はない」という信念を持つ。現在は某音楽事務所に所属し、クラシックからヒップホップ、サルサ、邦楽まで国境・ジャンルを越えた活動を展開中。

ヴァイオリン：宇野 格

4 歳よりヴァイオリンを始める。高校、大学、某 IT メーカーとそれぞれの所属先でオーケストラに属し、コンサートマスターを務める。時折仕事として演奏することもあるらしい。知っている曲はジャンルを問わず即座にヴァイオリンで演奏できるという特殊能力を持ち、当団演奏旅行の朝はラジオ体操の伴奏を担当する。今回は人生で初めて第二ヴァイオリンを担当する。

ヴィオラ：林 俊夫

5 才よりヴァイオリンを始め、大阪大学交響楽団、大阪モーツァルトアンサンブル、東京ムジークフロー、アンサンブル 70 s などでコンサートマスターを歴任。心を慰める音色に惹かれて 30 代半ばよりヴィオラに取り組み、現在は林徹也氏（元シュトゥットガルト室内楽団首席奏者）に師事している。建材の営業のため全国を飛び回る傍ら、月何回かの演奏会をこなしている。

チェロ：坂本 謙太郎

13 歳からコントラバスをはじめ、15 歳でチェロに転向。飛山宣雄氏、菅野博文氏（昭和音大教授）、Franz Bartolomey 氏（ウィーンフィル首席奏者）らに師事。経営コンサルティング会社に勤務しており、メシドールの本番が近づくとなぜか忙しくなる。目下 8 月出版予定の書籍および本稿の締切に追われている。35 人の出演者のうち、全ての演奏会に出演している唯一の奏者でもある。

コントラバス：島田 奈央

中学校でコントラバスを始め、高校の管弦学部では部長として天下をとる。大学のオーケストラに入団するも、一度知った天下の味を忘れられず 1 年で退部し、十代のうちから社会人オーケストラに参加。コントラバス奏者の常として、ジプシーのようにさまざまな音楽団体を旅しているため、若いのに東京の音楽界での顔はやたらに広い。

当ページの内容は若干の誇張と多分な言葉遊びを含んでいます。

